
狂間と狂元

さんび

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

狂間と狂元

【Nコード】

N1619B

【作者名】

さんび

【あらすじ】

少女は不運だった。傘を持っていないときに限って雨が降ったり、時間をかけて行った店が休みだったり。下校中に、いきなり命を狙われたり。狂った人間、キョウゲン狂間を元に戻す、キョウゲンシ狂元師、涼と夕里と中間達の戦いが、今始まる。

狂気人間と狂元師（前書き）

昔書いた小説です。生まれて初めて書いた小説ですので、楽しんで読んでくれたら嬉しいです。

狂気人間と狂元師

雨の降る季節だった。

彼は傘も差さずに走っていた。目には何も映さずに。ただ、ただ、前へ、前へ。走っていた。まるで……。何かから、逃げるように。

狂間と狂元1

く 狂気人間

と狂元師く

「うわぁ、すごい良いお

天気。太陽なんて久しぶりですね、涼さん」

町の喧騒から少し離れた小山の中。一見ペンションととれる、小さな小さなバシヨ。カフェ『日向草』。店の一番大きな両開きの窓を開け放ち、一人の青年が顔を綻ばせる。

「梅雨の時期

の太陽って、何だか嬉しいですよね」

女性のような優しい表情に肩まで伸びた色素の薄い柔らかい髪。線の細い青年は何処か脆く、儚い印象を与える。

「夕里」

大きな窓の近くに位置するレジの上から声が響く。子供のものでも、大人のものでもない不思議な声。子供の様な無邪気な、それでいて大人の様な冷静な声。レジ台の上に座り込み、足をブラブラとさせている少年、涼が、花瓶に差さっている紫陽花を指先で突きながら青年の名前を呼ぶ。顔は動かさずに、吊り上がり気味の大きな猫目を、青年、夕里へと向ける。小柄な体躯に無造作にはねた黒髪。整った顔は、見た者を引き込む不思議な魅力がある。形のいい小さな口は棒付きのキャンディを頬張っている。

「

紫陽花なんて食えないもの飾らなくていい」

「いい加減食べ

られるか食べられないかでものを判断するの止めませんか？涼さん」カラコロと飴を口の中で鳴らす涼に苦笑しながら、夕里は窓の傍から離れる。手には薄紫の紫陽花が二本、握られていた。

「お前：俺の話を聞いてたか？」

「勿論ですよ。ただ、全てが自分の思いのままだと思ったら大間違

い
で
す
」

「ケケ…良い性格してやがるぜ」

涼は白と紫のマーブル模様の飴を噛み砕き、肩を揺らして、笑った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1619b/>

狂間と狂元

2011年1月16日09時17分発行